いしかり博物誌 116

林でプール？

▲海岸林内の融雪プールのひとつ（2011年5月12日）。大きいプールは幅30m、長さは1km近く続いています。

この春、林の中に天然のプールが出現しました。

石狩の海辺に広がる海岸林。厚田区知津狩（しらつかり）から小樽市銭函まで延々と続き、海岸のカシワ林としては世界でも有数の規模です。そんな林の中に、春になるとたくさんの細長い水たまりが出現します。「融雪（ゆうせつ）プール」と呼ばれています。

例年、4月上旬に雪が解けると一気に水がたまり、その後だんだんと水位は下がり、2カ月くらいで干上がってしまいます。しかし年によっては、まったく水がたまらない春もあれば、たっぷりと水がたまり初夏までプールが続くこともあります。直前の冬の積雪量や、春になってからの降雨量などの違いが影響しているようです。

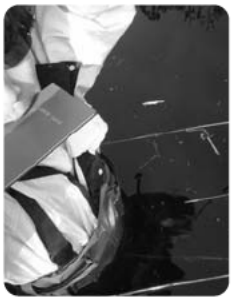
今年の春は、3月にたびたび大雪が降ったせいか水量がとても多く、水深1mを超える融雪プールもいくつもできました。最大のものは深さ1.3m。本当にプールのように泳げるほどでした。夏になっても干上がるどころか、反対に大雨で増水するほど。このまま冬になって凍結するまでプールが続きそうです。

今年はめったにないケースですが、ほとんどの年は夏までには干上がってしまう融雪プール。しかし、そこでも水生生物が暮らしています。その代表、キタホウネンエビは、長さ2㎝くらいの甲殻類。その卵は乾燥・凍結に耐えられるので、プールが干上がり、雪に覆われても、また翌春に水がたまったとき、孵化（ふか）できるのです。キタホウネンエビは世界でも石狩と下北半島（青森県）でしか確認されていない種で、青森県では「最重要希少野生生物」に指定されています。

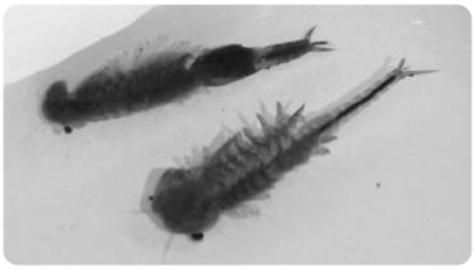
融雪プールができる秘密は、地形にあります。海岸林内の地形は、まるでトタン板のような波状の凹凸になっていて、融雪プールはその細長い凹部にできる水たまりだったのです。この凹凸は今でこそ海岸林の中でしか見られませんが、開発の手が入る前は、現在の花川や樽川、生振など、石狩の低地の大部分に広がっていました。かつてはキタホウネンエビも、春になると至る所に出現していたことでしょう。

（志賀健司）

詳しくは、連続講座
「石狩大学博物学部」第3回
（12月10日）で！　→26ページ



水深1.3m、胸まで漬かって▶観測中。



▲融雪プールに生息するキタホウネンエビ。全長2cm。

■文化財課・いしかり砂丘の風資料館
☎62-3711　✉bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp

ERIS「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ（http://www.i-eris.tv/）でもご覧いただけます。